

風景と想像力

——ウィンダーミア湖畔のクライフ・ステーションをめぐる——

Claife Station, Claude Glass and the Imagination

今村隆男

Takao Imamura

2006年10月6日受理

イングランド北西部に位置する湖水地方最大の湖、ウィンダーミア (Windermere) を渡るフェリー・ポイントの西側の坂道を登っていった高台に、一つの廃墟が建っている。クライフ高地の端にあたるこの場所は(建物と共に)クライフ・ステーション (Claife Station) と呼ばれており、18世紀の半ばにこの地へのピクチャレスク (Picturesque) ・ツーリズムが始まった頃からツーリストが押し寄せ、19世紀前半まで人気のあった観光ポイントである。¹⁾

「ステーション (眺望点)」 (“station”) とは、ピクチャレスク・ツーリズムで求められた風景画のような眺望を見渡せる場所のことで、ウェスト (Thomas West) が湖水地方ガイドブックのベストセラー『湖水地方案内』 (*Guide to the Lakes*, 1778) で数多くの「ステーション」を紹介したことで、この言葉は一躍有名になり、彼が紹介した各「ステーション」はツーリスト達の必訪の場所となっていった。『湖水地方案内』の中で、ウェストは主要な湖について各々いくつかの「ステーション」を選び出して順番に数字を付け、そこから見ることでできる風景を詳細に描写している。ウィンダーミアに関しては5つの「ステーション」が紹介されているが、クライフ・ステーションは最初の“STATION I”とされて、次のように説明されている。

Near the isthmus of the ferry point, observe two small oak trees that inclose the road, these will guide you to this celebrated station. Behind the tree on the western side ascend to the top of the nearest rock, and from thence in two views command all the beauties of this magnificent lake. The trees are of singular use in answering the purposes of fore-ground, and of intersecting the lake; the rock rises perpendicular from the lake, and forms a pretty bay; in front RAMPS-HOLM (BERKSHIRE ISLAND) presents itself in all its length, cloathed in wood. To the left the ferry point, closing with CROW-HOLM, a wooded island, form a fine

promontory. Just behind this, the mountain retiring inward, a semicircular bay is formed, surrounded with a few acres of the most elegant verdure, sloping upward from the water's edge, graced with a cottage, in the fine point of view. (West 59-60)

クライフ・ステーションに至る目印は2本の小さいオークの木であるとしか説明されていないが、他の「ステーション」に関しても、その場所への道程の説明は極めて簡略的である。しかし、「ステーション」からの眺望の描写は非常に詳しく、“STATION I”に関しても、この後4ページもかけてどのような風景がそこから眺められるのかが各々の方向ごとに説明されている。引用文からも明らかなように、クライフ・ステーションが“STATION I”に選ばれた理由は、細長い湖の中央部に位置するこの場所から、左右に広がって伸びている「二つの風景」を両方共、美しく見ることができるからである。²⁾ここに描かれた風景は、前景、中景、遠景、サイド・スクリーンからなる理想的な「構成」要素を持った典型的なピクチャレスクの眺望として描かれている——前景には木々があって彩りを添え、中景は湖岸のサイド・スクリーンに囲まれて半円形の入り江になっていて、そこにはいくつかの小島が浮かんでおり、背後には山々が遠景をなしている。

クライフ・ステーションは、このようなピクチャレスクの風景美を最大限に楽しむために、小島の影に遮られて遠方が見えない程低くもなく、激しい恐怖感を感じるほど高くもない、適度な高さの所を慎重に選んで定められている。この場所には以前から、地元の地主のブレイスウェイト (Revd William Braithwaite) が八角形の建物 (“pleasure house”) を建てていたが、ウェストのガイドブックによって人気が出ると、その建物は景観を楽しむための2階建ての夏の別荘 (summer house) に変えられた。湖岸のフェリー・ポイントからこの建物への登りのアプローチは螺旋状になっており、その後半は湖に背を向けて景観が見えないまま建物の後ろ側から入り、2階に上がったときに初めて湖の眺望が目に飛び込んでくるように工夫されている。

た。³⁾以上のような眺望へのアプローチの仕方は、当時、多くの場所で高台からの眺望を楽しむために取られていたようである。

この建物の最大の特徴は、湖に面した方の2階の窓に色ガラスが嵌め込まれていたことである。この建物は現在、文化遺産としての価値を認められて、ナショナル・トラスト (the National Trust) の所有になっているが、ツーリストに人気があった18世紀から19世紀にかけて、ピクチャレスクの眺望をより楽しめる効果を出すよう、2階のドロワー・ルームには湖に面して大きな窓が付いており、各々に色ガラスが嵌められていた。夏の風景を楽しむための黄色、秋の風景のためのオレンジ、春の風景のための黄緑、冬の風景のための水色の他、月明かりの効果を出すための濃紺や雷の印象を与えるためのライラック色のガラスまで入れられていたという (Otley 4)。ツーリスト達はこれらの色ガラスを通して眼前に広がる風景を見て、各々のガラスの色が与える人工のイメージを通して風景を楽しんでいたと言える。

どのような理由でこのクライフ・ステーションの窓が作られたのかを考える際、参考になるのが、当時のツーリスト達の必需品であったクロード・グラス (Claude glass) である。ピクチャレスク美学が理想とする風景の基準となったのは、主としてクロード・ロラン (Claude Lorrain) やサルバトール・ローザ (Salvator Rosa)、ガスパール・プッサン (Gaspard Poussin) の3人の画家による風景画であり、多くのピクチャレスク・ツーリスト達は、彼らが描いた絵のような風景を求めて国内の風景鑑賞ツアーに出たのであったが、ヨーロッパの北国イギリスの風景が、クロードの絵に描かれたイタリアの明るい穏やかな風景や、ローザの絵に描かれたアルプスの険しく荘厳な風景に似ているとは限らないのは当然のことであろう。そこで、その隔たりを埋めるために、即ち、クロード・ロラン的風景等を演出するために、当時のピクチャレスク・ツーリスト達が持って行ったのがクロード・グラスである。⁴⁾

クロード・グラスとは、長方形や楕円形の鏡の入った、やや大きめの女性用のコンパクトのようなもので、当時のツーリスト達はクロード・グラスを利用することによって、目の前の風景を、というよりも、クロード・グラスは見たい風景に背を向けて鏡に映して使用するので後ろの風景をと言った方がよいかもしいが、少しでも理想的なピクチャレスクの風景に近づけようとするものであった。即ち、クロード・グラスの使用の目的は、その風景を鏡の枠の中に納まる小さな「調和」した理想的風景とし、それをセピア色等の色彩に変え、自由に人工的な風景を楽しむことであった。⁵⁾ギルピン (William Gilpin) は、『森林風景論』 (Remarks on Forest Scenery 1791) の中で、その

「効果」 (effect) を次のように説明している。

In wooded scenes like these, the plano-convex-mirror, which was Mr. Gray's companion in all his tours, has a pleasing effect. Distances indeed, reduced to so small a surface, are lost.... When we examine nature at large, we study composition, and effect. We examine also the forms of particular objects. But from the size of the objects of nature, the eye cannot perform both these operations at once. If it be engaged in general effects, it postpones particular objects: and if it be fixed on particular objects, whose forms, and tints it gathers up with a passing glance from one to another, it is not at leisure to observe general effects. —But in the minute exhibitions of the convex-mirror, composition, forms, and colours are brought closer together; and the eye examines the general effects, the forms of the objects, and the beauty of the tints, in one complex view. As the colours too are the very colours of nature, and equally well harmonized, they are the more brilliant, as they are the more condensed.

(Gilpin 2 224-5)

肉眼で風景を見る場合は、風景の中の個々の対象に各々焦点を当てて見なければならぬが、「グレイ氏がいつも旅行に携えて行った平凸鏡」、即ち、クロード・グラスを使えば、近くのもの (個々の対象) も、遠くのもの (風景全体の印象) も、まとめて「一つの複合した風景」として見ることができ、全体の構成も個々の対象の色や形も全てが「調和」したものに変容される、というのである。

クロード・グラスの使用によって、近景が際立ち、それ以外の部分、即ち、中景や遠景の細部は失われてしまうことになるが、そのことが返って風景全体を一つの融合した調和的風景に変えてくれる。ギルピンは、風景を見る際に重要な点は、その「構成と効果」を考慮することであるとするが、その「効果」とは、「新しい光」のもとで景観を楽しむことであり、それは結局、「一つの焦点のもとに、全体 (の景観) を見渡せる」こと、即ち、個々の対象の形や色合いを「統一」し、一つの「調和」的風景を見る側にもたらしてくれることなのである (Gilpin 2 226)。

引用文の最後で、風景の構成だけではなく色彩の「調和」があれば、風景はより素晴らしいものとなるとギルピンは述べているが、フォズブルック (T.D. Fosbroke) はその点に関して当時のクロード・グラスの次のような「効果」に注目している。それは、クロード・

ガラスの鏡の部分に付けられている様々な色が風景の一日の時間帯や季節を変えてしまうという「効果」である。例えば、黄色の鏡は、午前中の風景を夕刻の黄昏の眺めにしてしまうし、白い霜に覆われたような色のつけられた鏡は、「刈り取られて積み重ねられた遠くの小麦を、雪の吹き溜まりにしてしまう」(Fosbroke 83)、等である。

これらの効果は、目的地を訪れる時間や季節を限られた観光客達にとって、風景の楽しみの幅が広がるよう考案されたものであるだろうが、ギルピンが気象状態や季節が風景をどのように変化させるのかについて語った次の文章を読めば、鏡の色合いが作り出すこちらの方の「効果」もまた、各々バラバラの対象の集まりだった風景を一つの「統一」性を持った「調和」的風景に「修正」する力であることがわかるだろう。クロード・グラスの持つこのような「効果」は、次のような自然現象——ここでは、初秋の霞、霧——と同じものであると考えてよいと思われる。

The calm, overcast, soft, day, such as these climates often produce in the beginning of autumn, hazy, mild, and undisturbed, affords a beautiful medium: spreading over the woods a sweet, grey, tint, which is especially favourable to their distant appearances. The internal parts of the forest receive little advantages from this hazy medium: but the various tuftings of distant woods, are wonderfully sweetened by it; and many a form, and many a hue, which in the full glare of sun-shine would be harsh, and discordant, are softened, and melted together in harmony. (Gilpin 1 234-5)

風景によっては、初秋の霞や霧等が、「不調和」な風景を穏やかにし、全体を融け合わせて「調和」したものにする。つまり、クロード・グラスは、このような自然現象のもたらす「効果」を人工的に生み出す装置なのである。そして、このような「調和」的風景の連続こそ、「想像力」の効果であるとされる。

In a chaise particularly the exhibitions of the convex-mirror are amusing. We are rapidly carried from one object to another. A succession of high-coloured pictures is continually gliding before the eye. They are like the visions of the imagination; or the brilliant landscapes of a dream. Forms, and colours, in brightest array, fleet before us; and if the transient glance of a good composition happen to unite with them, we should give any price to fix,

and appropriate the scene. (Gilpin 2 225)

このように変容された風景を継続的に見ることであれば、それこそ正しく「想像力のヴィジョン」であるとギルピンは言う。ギルピンが「想像力」と呼んでいる、視覚の対象である風景を理想的なものに変容させて見せてくれる内面的な力——ギルピンによるクロード・グラスの説明は、ピクチャレスク美学における想像力の考え方はロマン派的想像力に繋がってゆくものであったことを明らかにしていると考えられる。

以上の検証によって、クロード・グラスはピクチャレスク・観光客にとって想像力を使って風景を見るための具体的な「装置」としての意味を担っていたことが明らかになった。ここから、クライフ・ステーションの建物が作られた目的も容易に推測できるだろう。対象を一つの「統一」性を持った「調和」的風景に修正して見せてくれるクライフ・ステーションの建物のガラス窓は、言わば「大きなクロード・グラス」であったと言える。

ところで、『湖水地方案内』の中で、同じように「風景鏡」(landscape mirror)、即ちクロード・グラスの使用を薦めているウェストは、次のようにその効果を説明している。

The landscape mirror will also furnish much amusement, in this tour. Where the objects are great and near, it removes them to a due distance, and shews them in the soft colours of nature, and in the most regular perspective the eye can perceive, or science demonstrate.

(West 12)

ウェストのこの説明と比べることによって、ギルピンのクロード・グラスの解釈の特質は明白であろう。ウェストによれば、クロード・グラスの効果とは、近過ぎる対象を適度な距離・適度な色彩に見えるようにすることによって、「最も標準的な」(the most regular) 風景に変える効果である。つまり、彼が強調するのは、クロード・グラスの持つ、レノルズ (Joshua Reynolds) の言葉を使えば、風景を「一般化」する作用なのである。ギルピンにとっては、クロード・グラス使用の目的は、見る者が目の前の風景をそのままの形で受け入れるのではなく、それを理想的に「調和」した風景や、ある種の「効果」を狙った様々な特色ある多様な風景に変容させることであった。この相違は、ウェストの時代からギルピンの時代の風景観への変遷を顕著に表している。⁹⁾そして、ギルピンが強調している、風景を見る目の変容力は、さらに次のロマン派の時代の詩人達の創作活動の根幹である主観的想像力へと道を拓くものであったと言える。ガラスの色や「効

果]が固定されているクライフ・ステーションやクロード・グラスは、限定的な意味での「調和」風景しか与えてくれはしないが、次の時代、ロマン派のより内面的・主観的な想像力は、このような「装置」をもはや必要とはしなくなるのである。

Notes

- 1) 湖水地方への初期のツリストの一人であった詩人のグレイ (Thomas Gray) がここを訪れた記録があるが、その当時、すでにここは先人達にとって有名な眺望点となっていたようである (Clarke 143)。
- 2) ウィンダーミア湖は全長17kmにも及ぶが、幅は狭いところでは400mしかない大変細長い湖であり、クライフ・ステーションはその中央部に位置する。
- 3) Andrews 166. アンドリューズは、James Plumtre, 'Narrative' (Cambridge University Library MS. Add. 5815, f. 288) を参考にしている。現在、クライフ・ステーションは、ナショナル・トラストの手によって、フットパスの整備と生い茂りすぎて景観を遮っている樹木を取り除くなどの作業が行われている。
- 4) 18-19世紀に使われたクロード・グラスの現物のいくつかは、現在、ロンドンの科学博物館 (Science Museum) で見ることができる。
- 5) Hussey 107. 本論で言及した画面全体の「調和」性が、理想とされたクロード・ロランの風景画の特色であるとされる。また、贋作を防ぐために作られた、クロード・ロランの作品のカタログとも言うべき『真実の書』(Liber Veritatis) が、すでに18世紀前半にイギリスに持ち込まれていたが、それはセピア色のインクで刷られていた。
- 6) クライフ・ステーションの窓ガラスやクロード・グラスの鏡も、風景を見る側の視点の変化と共に発展していったはずであるが、情報が乏しいため詳細は確認できない。ウェストによれば、クロード・グラスの鏡の色は'dark'と'silver'の2種類であるが、これらは各々、晴天と曇天の際に風景を見やすくするためのもので、フォズブルックが言うような効果を狙ったものではない。ただし、フォズブルックが挙げているような様々な色つきの鏡は、ここから発展していった可能性も考えられる。クライフ・ステーションの窓の色ガラス

に関しては、アンドリューズは3枚(種類)であったと述べているが、それは1799年夏にそこを訪れたメイトンの記録を拠り所にしていていると思われる (Andrews 166. W. G. Maton, "A Sketch of a Tour from London to the Lakes made in the summer of the year 1799" British Library MS. 32, 442, I, f.30 参照)。そして、19世紀にはいり、窓ガラスの色の種類はさらに増えていったものと想像できる。

Works Cited

- Andrews, Malcolm. *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1769-1800*. Aldershot: Scolar Press, 1989.
- Clarke, James. *A Survey of the Lakes of Cumberland, Westmorland, and Lancashire: together with an Account, Historical, Topographical, and Descriptive, of the Adjacent Country. To which is added a Sketch of the Border Laws and Customs*. London: Printed for the author, 1787.
- Fosbroke, Thomas Dudley. *The Wye tour, or, Gilpin on the Wye: with Historical and Archaeological Additions, Especially Illustrations of Pope's Man of Ross*. Ross: W. Farror, 1818.
- Gilpin, William. *Remarks on Forest Scenery, and other Woodland Views, (Relative Chiefly to Picturesque Beauty) Illustrated by the Scenes of New-Forest in Hampshire*. 2 Vols. London: R. Blamire, 1791.
- Gray, Thomas. *The Poems of Mr. Gray: to which are Prefixed Memoirs of his Life and Writings*. Ed. William Mason. London: Stonegate, 1775.
- Hussey, Christopher. *The Picturesque: Studies in a Point of View*. London: G. P. Putnam's Sons, 1927.
- Otley, Jonathan. *A Concise Description of the English Lakes*. 6th Ed. London: J. Richardson, 1837.
- West, Thomas. *Guide to the Lakes: dedicated to the lovers of Landscape studies, and to All Who Have Visited, or Intend to Visit the Lakes in Cumberland, Westmorland, and Lancashire*. Kendal: Richardson and Urquhart, 1778.